

■ フォト・エッセイ ■

中国雲南省 ——少数民族の棚田——

写真文
犬塚雅貴
Masataka Otsuka



雲南省南部、金平から車で30分ほどの山間部の棚田ではヤオ族が民族衣装を纏って田植えを行っていた

日本では生産性がないとか、斜面が多く機械の導入が難しいという理由で失われつつある棚田。さらに地方では高齢化や過疎化によって休耕田が増え続けている。そこで、最近は棚田の景観美を残そうという動きが盛んだ。今では六〇を超える自治体が棚田連絡協議会を組織し、多くのイベントを開催。オーナー制などを取り入れて、地域活性化とともに棚田の魅力を伝えている。

その一方、中国雲南省の山間部では棚田の光景が消えるどころかコメを愛する少数民族たちが次々と山を削り、新しい棚田を築き上げている。ここは雲南省・南部の哀牢（あろう）山脈に位置する元陽県。私をはじめこの地を訪れたのは一〇年ほど前。きっかけは昆明の写真家から見せてもらった一冊の写真集にあった棚田の風景。その後、何度もこの地を訪れては四季が織り成す風景や独特の習慣や文化を守る少数民族の撮影を行ってきた。

雲南省の省都・昆明からベトナム国境へ向けて三五〇キロを一〇時間かけて南下する。山々を縫うようにしてデコボコ道を走り、いくつもの峠を越えて川を渡ると、木々の間から谷間を埋め尽くすほどの棚田が見えてきた。標高一六〇〇メートルの斜面を縫うように走る道路からの眺めは、まるで等高線を引くように規則正しい畦が作られ、さらに谷底に目を向けると、クモの巣を張り巡らせたような棚田が広がる。数百段を越す棚田の総面積は約二万四〇〇〇ヘク



阿得博付近では急傾斜の棚田が多い。幅1.5メートルほどの小さな田一枚一枚を水牛で耕した後で苗を植えていく



5月に植えた苗は6月下旬になると谷間を青く染め、雲の間から陽射しが注ぐと風になびいてキラキラと輝いた



88歳になるハニ族のお婆さん。「毎日、家と棚田との間を往復していると、足も鍛えられ農作業も苦にならない」と、話す

雑草を刈り、害虫を駆除し、必死に守ってきた稲を収穫する10月初旬。「1年のうちで最もうれしい季節」と話すハニ族の女性は鎌を手を微笑んだ



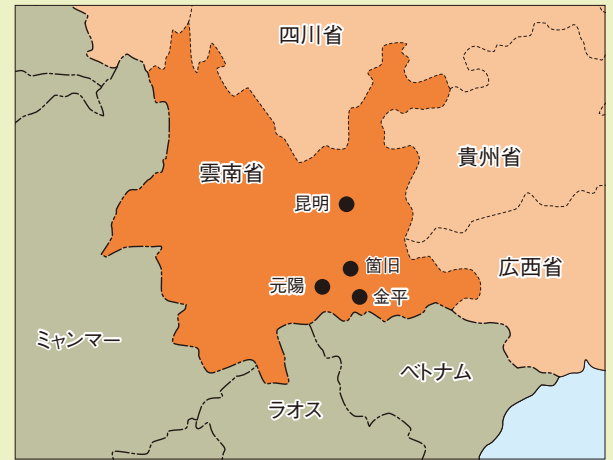
タール。それはまさに息を呑むほどの光景であった。

これらの棚田はおもにハニ、ヤオ、イ、ミャオ族などの少数民族が千数百年前の唐の時代から育んできた。「ここが稲作のできる限界なのです」と稲を大事そうに見守るイ族の李さん。標高一八〇〇メートル、年間の平均気温は一・六度。ベトナム国境に近い温暖な気候に位置しながらも、李さんが暮らす高山区と呼ばれる地域では稲作農家にとって厳しい環境であった。私が訪れた雨季の最中には連続七日間も霧に覆われ、六月の平均雨量は二六〇ミリにも達した。

ぬかるんだ畦道は崩れやすく、七月は水害によって土砂崩れが起き棚田が被害に遭うことも少なくない。草を刈り、畦をしつかり固め、長さ二〇センチほどの苗を植えていく。「この棚田だけでは暮らしていけない」。半年ぶりに帰ってきた李さんの息子が苗を握り締めて言った。彼は「毎年、建水へ出稼ぎに行くが、田植えと稲刈りには必ず帰省する」と続けた。電気は来ているが、テレビもなければ冷蔵庫もない。中国でも都市と農村の格差が問題となっている。六人で暮らす李さん一家は七ムー（四・四五ヘクタール）を持ち、この年の収穫は約七五〇キロ。品種改良が進んでも稲作にとって厳しいこの土地で満足な収穫は望めない。さらに冷害や稲が腐る稲熱病など、六五種の虫害と六八種の病害が確認さ



山間部にたたずむハニ族の村。ミャオ族やイ族など、棚田の周囲にはそれぞれの民族によって築かれた村が点在し、村の中は石畳で作られた道が張り巡らされている



金平から山間部へ車で1時間走ると、刺繍のスカートが美しいミャオ族の住む小さな村があった。3月、農閑期のシーズンには衣装作りに精を出していた



れ、農薬を買えない農家は豊作を神に祈り続けることしかできなかった。

そして、村にある小学校を訪ねると、そこには一年から六年生まで全生徒二〇六人の子供たちがいた。その表情は明るくて無邪気。天然藍で染められた制服に共産党の印である赤い布を巻き、必死に先生を見つめる眼差しは真剣だ。箇旧市から来た王校長は「村全部の子供たちが来ているわけではない、貧しい家庭では半年分のわずか七元の学費すら払えない」と話す。現金収入が少なく、老人は文字を書く人も少ない。それでも数十年前に比べれば生活はよくなったと人々は口を揃えた。どこへ行っても棚田に暮らす人々は苦しい生活を送っているが、必死に生きる人々の姿は棚田の美しさ以上に私の心に深く残った。

セミが鳴きトンボが舞う夏。腰の位置まで伸びた稲の隙間に入って雑草を取り、アヒルを放して害虫駆除を行う。そして一〇月、黄金色に染まった棚田には真っ赤な帽子に銀の大きなイヤリングをつけたヤオ族の女性の姿もあった。深さ一・五メートルほどの大きな容器に刈った稲を叩きつけて脱穀を行う。隣の田ではイ族がまたその隣ではハニ族が稲刈を行っている。民族の境界線はない。数段ごとに家族単位で分けられた棚田だ。その境界線をどこで見分けるか、彼らには一目瞭然。「敵でもない、ただ民族が違うだけ」「私たちは土地を分け合い、争うこともなく暮らしてきたからこ



最近は道路の発達により物資の流通が盛んになり便利な洋服を着るようになったため、このような衣装を着る女性も減ってきてしまった



棚田のある少数民族の村では、男性よりも女性の方が良く働く。重さ30キロ、収穫を終えて穂を詰め込んだ袋を背負って家に向かうヤオ族の女性は30分かけて山を上り続けた



ハニ族の村を訪れると、村人は私たちを歓迎するためにたくさんのご馳走を用意してくれた。高菜の漬物、豚肉の炒め物、そして赤米などが並んだ

その景観があるんだ」とハニ族の男は誇らしげに言った。

元陽からさらに車で半日、ベトナム国境へ三〇キロに迫る金平を訪れた。ここにはハニ、イ、ミャオ、ヤオ族が暮らしている。周囲を山に囲まれ、その斜面にはまるで天に続く階段のように潤った青々としたイネが輝いていた。街の米店では新種や色が違う様々な種類のコメが並んでいた。赤米、白米、もち米、香りのよい五〇二、四四九などもある。この辺りでとれたコメはどれも粘りがあり、噛むとジャポニカ米のような歯ごたえ。どれもおいしいコメばかりだ。足りなくなれば、南へ三〇キロのベトナム国境からコメが輸入されるといふ。

「よく来たねえ」、「さあご飯を一緒に食べましょう」。数年ぶりにハニ族の家族を訪れると、温かい言葉で私を迎えてくれた。久しぶりに会った八一歳のお婆さんは元気だった。茶碗いっぱい盛られた白いごはん。お年寄りから子供まで一家そろっての食事の時間は、苦勞を忘れ笑顔が絶えないささやかな楽しいひと時であった。電話もなければテレビもない。街のにぎやかな生活にあこがれることはあっても村を離れることはない。それは先祖が切り拓いた土地を敬い、稲作への執念を抱き続けているからだ。私は棚田というこの美しい伝統を守り続けてほしいと願わずにはいられなかった。

(おおつか まさたか / 写真家)